

痒み治療薬開発への基礎と臨床からの提言 - 創薬へのアプローチ -
Suggestion from the basic study and clinical research for developing anti-pruritic medicine: Approach for pharmaceutical development

安東 嗣修¹, 奈邊 健²(¹富山大学大学院 医学薬学研究部 応用薬理学, ²京都薬科大学 薬理学)

「痒み」は、多くの皮膚疾患(一部眼)にみられる重要な愁訴である。痒みによる掻破は、皮膚症状の更なる悪化を招き、患者の QOL を著しく阻害する。現在の痒み治療薬の第一選択薬はヒスタミン H1 受容体遮断薬であるが、臨床上問題となっているアトピー性皮膚炎をはじめとする慢性掻痒性皮膚疾患の痒みには無効である場合が多い。従って、新たな鎮痒薬開発が求められている。

これまで痒みの研究は、主としてヒトで行われてきた。その為、倫理面等から詳細な痒みの発生機序に関する研究や新規化合物の痒みに対する効果に関する研究は難しく、すでに多くの病態動物モデルが開発されていた痛みの研究に比べ非常に遅れをとっていたのが現状である。最近ようやく、動物を用いた痒みの評価法や痒みの動物モデルが開発されてきたことから、様々なアプローチができるようになり、現在盛んに痒み研究が行われるようになった。そこで、本シンポジウムでは、皮膚科(生駒, 高森)、製薬関連企業(新井, 宮本)及び大学(稲垣, 藤井, 安東)の先生方に痒みの発生機序及び治療薬開発のターゲット分子等に関して多方面から講演をしていただきます。以上の講演を基に新たな鎮痒薬開発へのアプローチができればと考えています。